

氏 名 西田 彰一

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 1954 号

学位授与の日付 平成29年9月28日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 国体論者としての笈克彦—その思想と活動—

論文審査委員 主 査 教授 瀧井 一博
教授 ジョン ブリーン
教授 牛村 圭
名誉教授 末木 文美士
総合研究大学院大学
准教授 樋浦 郷子 国立歴史民俗博物館

論文の要旨

Summary (Abstract) of doctoral thesis contents

申請者は、これまでにほとんど研究の対象とされてこなかった 1900 年代から 1930 年代半ばにおける国体論の実態の解明のために、笈克彦の思想と活動を対象に研究を続けてきた。本論文は、その成果である。

国体論とは、天皇と国家への忠誠を絶対視する思想として、戦前の日本において確立された国家イデオロギーである。国体論は戦争への国民動員などにおいて思想的に重要な役割を果たしたが、敗戦に伴って否定されたため、戦後殆どその研究が進展していなかった。しかしながら冷戦終結による世界情勢の変化を受け、思想研究の状況にも変化が生じ、山之内靖などによる総力戦体制論の研究が活発になると、同体制を思想面から下支えした重要な要素である国体論にも焦点があてられるようになった。近年では昆野伸幸や植村和秀、米原謙によって国体論の研究が進み、19 世紀後半における生成過程や、1930 年代半ばから終戦までの時期にかけて、総力戦体制に呼応して国家への主体的な忠義を促した国体明徴運動にみられる「新しい国体論」が台頭したことなど、その詳細な変遷が解明されつつある。

だが、現在の国体論研究にも問題点がある。それは、研究が 19 世紀後半、または 1930 年代半ばから終戦に至る時期のいずれかに集中しているため、その中間に位置する 1900 年代から 1930 年代半ばまでの時期の国体論が十分に検討されていないのである。しかしながら、当該期における国体論の変化は非常に重要である。なぜならば、この時期の国体論は宗教と関わることで、独自の特色を帯びるようになったからである。当時は、笈克彦や田中智学、山田孝雄のように、国体と宗教を結びつけて論じる国体論者が続出していた。彼らは大正期における個人の内面や生命の神秘性そのものを称賛する生命主義の流行や、その神秘的な力を神社が積極的に国民統合のために活用すべきだと唱える議論の影響を取り入れつつ、宗教と国体論を意識的に結びつけた独自の国体論の在り方を模索していた。だが、宗教と国体論の関わりに着目しそれを論じた研究は行われていない。

かかる問題意識から、申請者は特に笈克彦（1872 年～1961 年）という戦前の国体論者の思想と活動に注目して研究を進めてきた。笈克彦は戦前の法学者として知られており、独自の神道体系である「神ながらの道」「古神道」を提唱した人物である。従来笈は「神がかり」と揶揄され、殆ど研究がなされてこなかった。しかし、笈は 1900 年代から 1930 年代半ばにおける国体論の中でも特別な位置を占めている。例えば、大正天皇の皇后（貞明皇后）は、笈の思想に傾倒していたことが知られている。また、満州移民の推進者である加藤完治、守屋栄夫や二荒芳徳など当時の著名な政治家・官僚も笈の教え子である。

そこで申請者は、「古神道」「神ながらの道」を説いた笈の国体論はイデオロギーを国家が押しつける明治以来の国体論とも、戦時体制への国民の自発的な忠誠を促す「新しい国体論」とも異なる独自の性質を持つのではないかと考え、笈の思想と活動についての研究を通して、1900 年代から 1930 年代半ばに至る日本の国体論の考察を試みた。

上記の問題意識から考察を開始した本論文は、3 部 6 章として以下のような構成を持つ。第一部では、1900 年代から 1910 年代を対象に、笈の思想の形成過程にみる国体論と宗教の結びつきを論じた。日露戦後の社会の変動期において、従来のように国家が超越的にイ

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

デオロギーを押し付けるのではなく、国民個々人の内面に基づく国家形成が必要だと説いたのが 1900 年代の筧である。第一章では、国民一人一人の責任心に基づく自由な活動が、君民一体としての日本国家を生成発展に導き、その責任ある人格者を育てるためには宗教が要請されると論じた筧の議論に焦点を絞る。

続く第二章では、1910 年代以降の筧の思想形成を取り上げ、なぜ「古神道」「神ながらの道」に至ったのかを論じた。筧は君民一体の国体に相応しい責任ある人格者を育てるためには、信仰と実践を兼ね備えた宗教を、国の宗教に位置づける必要があるという立場をとる。この宗教における信仰と実践の一体性を重視した結果、筧は建国以来日本民族の精神的基盤には「古神道」「神ながらの道」があると意識しはじめ、これを日本の国の宗教、国教に据えるべきだと考えるようになる。こうして筧は自らの国体思想を宗教的国体論として確立したのである。

これを受けて第二部（第三章）では、「古神道」「神ながらの道」を国教に据えることを考えた筧が、1920 年代から 1930 年代半ばにかけてどのような活動をしたのかについて分析を行った。「古神道」「神ながらの道」に信仰を寄せるようになれば、君民一体の国体を生成発展させることができるという筧の主張は、貞明皇后の目に留まった。皇后の後ろ盾を得た筧は、自著を内務省神社局から発刊し、さらに自らの雑誌を創刊するなど、当時の社会に活発に訴えかけた。また、神社制度調査会では、神社を国の宗教、つまり国教にすべきだと唱え、教学刷新評議会においては、世俗を司る政府とは別に、祭祀教学を担う神祇府を設立しなければならないという宗教的国体論を繰り広げる。こうした筧の活動によって、国体と宗教を結びつける議論はピークを迎えたのである。

さらに第三部では、筧だけでなく、その教え子たちの活動も視野に入れた考察を試みた。まず第四章では、筧とその教え子たちによる〈やまとばたらき〉（皇国運動／日本体操）の活動の実態を論じた。筧とその教え子たちは、〈やまとばたらき〉を用いて、身体的修養を通じた君民一体の神話世界の体験と精神的教化を図ったのである。この〈やまとばたらき〉は筧の教え子である二荒芳徳が理事長を務めていた少年団（現在のボーイスカウト）や、同じく教え子である加藤完治の農業移民訓練所に採用され、終戦まで続けられた。

次いで第五章では、誓の御柱という五箇条の誓文の記念碑事業を取り上げた。筧とその教え子たちは、大正デモクラシーの影響を受けて活性化する民衆運動を目の当たりにして、「正しい」政治参加のためには、明治天皇が神々に「万機公論」などを誓った五箇条の誓文の精神に立ち返る必要があるとして、誓の御柱という五箇条の誓文を称える記念碑建設事業を立ち上げた。この事業において、明治維新を記念する国民の記念碑を造り上げることで、政治参加を肯定しつつも、君民一体の宗教的な国体こそが理想であると人々に示そうとしたのである。

そして第六章では、満蒙開拓青少年義勇軍訓練所や建国大学創設委員への就任、溥儀への進講にみる、筧とその教え子たちの植民地への影響を論じた。君民一体を理想として説く筧たちの議論は、植民地においては日本が遅れた植民地を宗教的に教化するという一方的な議論として働いたため、溥儀をはじめ、満州や植民地の現地の人々には頗る評判が悪かった。また、関東軍のように新しい秩序の構築を求める側にとっても、あまりに漠然としており意味をなさなかった。だが、筧たちの宗教的国体論は既に構築された秩序において「植民地問題」に励む内地出身のエリートたちを自己正当化する効果をもたらしたため、

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

彼らからは評価されたのである。

以上のことより、箕の国体論の特徴は、次のように要約できる。それは、国体論に宗教を導入することで、国民の政治参加や要望を認めつつ、内面への宗教的な教化と身体的修養の重視によって国民の自発の活性化と制御を図ったということである。箕たちはこのような国体論が既存の秩序を維持していく上では有用だと主張し、皇族や既存の社会的エリート層に支持された。だが、国体明徴運動がもたらした既存秩序の崩壊によって、1930年代後半以降徐々に退潮し、傍流に押しやられていったのであった。

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

博士論文審査結果の要旨

Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、神道理論に基づいた特異な憲法学を展開し、戦前の法学界に独特の光彩を放った筧克彦（1872-1961）の国体論に注目し、その成立と展開、そして歴史的意義を考察したものである。筧については、近時、憲法学や神道思想、植民地問題といった観点から重要な研究がいくつか発表されているが、本論文はそれらの成果を批判的に吸収しながら、これまで断片的にしか捉えられてこなかった筧の思想活動の諸相を総合し、彼の残した膨大な著述に取り組んで、その思想的全体像を再構成しようとしたものである。申請者はその作業のなかから、特に筧が構築した宗教的国体論を抽出し、近代日本の国体論史のなかでの位置づけを行っている。本研究は、筧に関する一次史料や二次文献を広範に渉猟して徹底的な読解を行い、従来の国体論に関する研究史の欠落を埋めようとした意欲作と評価できる。

本論文は序章と終章に挟まれた三部構成の全六章からなる。

序章「国体論研究の現状と課題」では、最近における国体論研究の進展とその問題点が考察されている。従来、国体論は戦前の天皇制国家への滅私奉公を促進するための空虚な国家イデオロギーとして片付けられ、真剣な学問的分析がなおざりにされていたが、1990年代に総力戦体制論が歴史学で関心を集めるなか、それを思想的に根拠づけた国体論の実態についても研究が進展した。申請者はそのような研究史の流れに棹差しつつ、これまでの研究には1900年代から1930年代にかけての国体論の雌伏期ともいえる時期の本格的な考察が欠けており、この時期に国体論を宗教と結びつける理論化を担ったのが筧だとしてその研究の意義を論じている。

第一部は「筧克彦の思想の形成過程」と題され、二つの章からなる。まず第一章「初期の思想—心理と宗教—」では、筧の1900年代から1910年代にかけての初期の思想形成がとりあげられる。ここでは特にディルタイやギールケといったドイツの哲学や法学が筧に及ぼした影響が詳論され、彼が宗教と国体論を結びつける契機を獲得していった諸要因が摘出されている。これを受けて、続く第二章「新時代の国体論を求めて—「古神道」へ—」では、1910年代以降の筧の思想の発展が論じられる。この時期に筧は当初傾倒していた仏教哲理の究明から古神道へと関心を移行させ、その体系化を行った。筧の憲法理論もその延長上に展開されたもので、彼は東京帝国大学の同僚である美濃部達吉や上杉慎吉とも区別される独自の憲法学を構築した。それは、汎神論的世界観に立脚して、天皇を主権的な絶対者や最高機関とは異なる「表現者」として位置づけるものだったと論じられる。

第二部「筧克彦の思想と活動」は、「『神ながらの道』と皇学の展開活動」と題された第三章が置かれる。ここでは初期の思想形成を経て、筧が1920年代から1930年代にかけていかなる思想の実践活動を行ったのかが詳述される。「古神道」「神ながらの道」を国教に据えるとの想念に達した筧は、貞明皇后の支持を得、自らの雑誌『皇学会雑誌 神ながら』の創刊、神社制度調査会や教学刷新評議会での活動を通じて、独自の宗教的国体論を錬成していく。かくして、国体と宗教を結びつけるという筧の思想がひとつの到達点に達したことが指摘される。

第三部「筧克彦の思想の広まり」は、第四章「国体の「体験」と身体技法」、第五章「誓

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

の御柱建設についての一考察」、そして第六章「植民地における笥克彦の活動—満州を中心に—」の三章構成である。まず第四章では、笥が創案した特異な身体運動である「やまとぼたらき（皇国運動／日本体操）」が考察される。それは、身体的修養を通じて君民一体の神話世界を実践し精神的に教化しようとする思想が投影されたものだった。この「やまとぼたらき」は、笥の教え子である二荒芳徳が理事長を務めていた少年団（現在のボーイスカウト）でも採用され、終戦まで影響を及ぼした。次の第五章で取り上げられるのは、誓の御柱という五箇条の誓文の記念碑事業である。大正デモクラシー後の民本主義的世相を憂えて、笥は弟子たちとともにこの事業に取り組む。そこには、「正しい」政治参加のあり方を示し、君民一体の宗教的な国体を顕現しようとした努力の痕跡が認められる。続く第六章では、満州国を中心に植民地における笥の影響が論じられる。笥は度々「外地」に赴くなど植民地経営にも多大な関心を示したが、彼の議論は、日本が遅れた植民地を宗教的に教化するという単線的なものであったため、現地で支持を得られなかった。しかし他方で、弟子で満蒙開拓青少年義勇軍を設立した加藤完治を通じて、植民地の統治にあたる日本人の精神的教化には寄与したことが指摘される。

終章「国体論者としての笥克彦の思想的特性」では、笥の思想と活動の限界と戦後における末路が検証され、彼の国体論の特徴が総括的に考察される。申請者は、笥の思想の特質は何よりも国体論に宗教を導入することで、国体思想の国民一人一人への内面化と外面的表出を図ったことにあると説く。そのうえで、笥の議論はあくまで既存秩序の維持を掲げるものだったため、1930年代後半以降の国家主義的革新運動の台頭の陰に隠れ、退潮を余儀なくされたと結論づけている。

以上のような内容の本論文は、これまで断片的にしか論じられてこなかった笥克彦の生涯や思想の実態について、その多彩な側面を網羅して全体像を提示した初めての業績であり、今後笥克彦を論じるにあたって、必ず参照されるであろうひとつの到達点を築いたものとして特筆される。また、国内の研究状況のみならず、海外の研究動向にも関心が払われているほか、思想史研究を通じて身体論、コロニアリズム、ジェンダー論といったアクチュアルな問題への論及もなされており、国際的かつ学際的な研究としての素地も十分に認められ、大きな可能性を感じさせるものとなっている。

そのうえで、本論文には克服すべきいくつかの問題点が指摘できる。

第一に、テキストクリティークの問題である。参照可能な限りの資料を収集し検討したうえで完成されたという特徴を有する本論文のなかで、特に笥の生涯の事績については、親族が残した回想に大きく依拠している点を否めない。現在のところ、傍証となるような資料の発掘はみられていないためやむを得ない面もあるものの、笥の周辺の人物の書き残した回想に対しては、より精緻な資料批判がなされるべきであった。

第二に、本論文は笥の思想や活動の多面性を総合してその思想的全体像を再構成しようとしたものであるが、その分、個々のテーマについての掘り下げに物足りなさを覚える点がある。一例を挙げれば、本論文は、1900年代から1930年代にかけての国体論の展開を考察し、研究史の欠落を埋めたという意味で意義深いものがあるが、笥と他の国体論者や神道思想家とのつながりや影響関係についてより踏み込んだ検討があれば論文の完成度は高まったであろう。

第三に、第二の点とも関連するが、研究の国際的展開についてより積極的な考察が望ま

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

れる。本論文で言及されている国民の身体的動員や植民地支配の意識形成、また貞明皇后や宮中女官たちへの影響というジェンダー的論点は、同時代における国際的連関性を有した問題として再検討される余地がある。今後の研鑽が期待される。

このように、本論文にはまだ改善の余地があるとはいえ、それはこの研究の価値を損なうものではない。むしろ、これからの発展可能性を秘めた部分としてポジティブに捉えることが可能である。論文審査委員会は、全員一致で本論文を博士の学位に相当すると判定した。